Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol.17, No.1 (March 1994)

大学運動部員の問題行動の構造

The structure of problem behavior in university athletes

竹之内 隆 志* 桂 和 仁**
奥 田 援 史*** 叶 俊 文****

Takashi TAKENOUCHI *, Kazuhito KATSURA **
Enji OKUDA ***, Toshifumi KANOU ****

The purpose of this study was to clarify the structure of problem behavior in university athletes. The problem behavior was defined operationally as a behavior which arouse unpleasant feeling of other people, decline team performance, and disturb teamwork. Concerning 67 items, 469 university athletes were asked to rate their feeling from a triple point of view-the degree of unpleasant feeling, the influence on team performance, and the influence on teamwork. At first, 50 items, whose mean ratings on unpleasant feeling scale were slightly or strogly unpleasant, were extracted. Subsequently, team performance and teamwork score data of these 50 items were analyzed by principal component analysis with normal varimax rotation.

The result showed that six primary components existed in both team performance data and teamwork data. The six primary components of team performance were labeled nonfulfillment of role-behavior, weak will of skill improvement, senior teammates' feudalistic manner, exclusive manner, punishment-given activity, and self-centered behavior. And the six primary components of teamwork were labeled weak will of skill improvement, social immaturity, uncoperative manner to rational management, lack of positive and/or subjective behavior, disobedient behavior, and senior teammates' feudalistic manner. Finally, these results were discussed in terms of the structure of problem behavior.

緒　　言

スポーツ集団を扱った研究は、従来、集団凝集性[1,2,3,4]、集団規範[12,16,17]、そしてリーダーシップ[5,13,15]などの枠組みから個々の成員を統合していく機能を果たす要因について検討されてきた。例えば、集団凝集性の研究においては集団がまとまる次元が検討され、集団規範の研究においては成員の行動を規制する暗黙のルールが検討されている。これらの研究は、集団が形成されたときに生じる心理的、社会的問題を解明していくという点で有益である。しかしながら、成員を統合する集団の機能的側面を重視するあまり、集団として統合されていく成員の行動の様態や変容の過程について十分に検討されているとは言い難い。阿江[1]は、集団凝集性の因子の一つとして対人魅力による凝集の因子を抽出している。このことは、集団がまとまっていくためには集団における対人相互作用がうまく機能しなければならないことを示して

* 名古屋大学総合保健体育科学センター
** 武蔵丘短期大学
*** 岡山大学
**** 皇学館大学
* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
** Musashigaoka College
*** Okayama University
**** Kogakkan University

いる。しかし、対人魅力を測定する項目は部員関係の善し悪しなどを直接評定するものである。そのため、部員関係の善し悪しを示す具体的行動や善し悪しを招く要因、そして関係改善のための介入方略には言及されていない。このような問題とともに指摘されることは、集団が統合されていくためには、集団を形成する個々の成員の行動変容が前提となるということである。これらのことを考慮するならば、従来の集団研究とは異なり、集団における個人に焦点を合わせ、個々の成員が示す行動の集団全体への影響について検討することが、集団で起こる種々の心理的・社会的問題の解決に有益であると思われる。

ところで、社会や集団に不利益をもたらすような個人の行動は、一般的に問題行動と呼ばれている[14,19,20,21]。ただ、問題行動の概念は、その時代、その場面に応じて変動するものであり、一義的に定義することが難しい[19]。長谷川[6]は、「問題行動」をその時代の社会状況との関連で論ずるしかないことを指摘したうえで、行動の問題性を「社会が暗黙理に抱く理想的青年像からの逸脱」という意味で定義している。これらのことを参考にすると、運動部員の問題行動は「部集団において暗黙理に抱かれている理想的部員像から逸脱した行動」とひとまず定義づけられる。運動部にあっても、成員によって示される行動が「問題」であると判断される基準は、その部の目標や指向性によって異なるものであり、そのため理想的部員像も一義的には定義づけにくい。しかしながら、集団凝集性の次元として課題凝集と対人凝集の２次元を指摘した研究[2]や、リーダーの機能として目標達成機能と集団維持機能の２つを明らかにした研究結果[15]を考慮すると、チームの競技成績の低下に影響する、あるいはチームの雰囲気を乱すということを判断基準として行動の問題性を定義することはあながち見当違いではない。

そこで、本研究では、運動部員が示す問題行動を「部集団において暗黙理に抱かれている理想的部員像から逸脱した行動であり、具体的には、他の部員が不快と感じ、チームの競技成績の低下を招いたり、チームの雰囲気を乱す点で問題である行動」と操作的定義づけを行なった。そして、成員を統合する集団の機能的側面ではなく、個々の成員が集団内で示す行動の問題性について検討することを目的とした。すなわち、大学運動部員が部の活動の中で示す種々の問題行動を抽出し、それらの行動がチームの競技成績や雰囲気に及ぼす影響から個々の行動の問題性の構造についての検討がなされる。

方　　法

１．調査対象者

大学運動部員１年生198名（男子125名、女子73名）、２年生131名（男子98名、女子33名）、３年生95名（男子69名、女子26名）、４年生45名（男子28名、女子17名）の計469名から有効資料を得、これらの者を調査対象者とした。

尚、対象者の選択にあたっては、集団種目に属していることを前提としたが、個人種目と考えられる種目でも、日常の練習が集団単位で行なわれ団体戦の大会が行なわれる種目に属している者も含めた。

２．調査時期

1993年10月および11月に調査を実施した。

３．調査内容

まず、調査項目を収集するための予備調査として、大学運動部員１年生116名（男子46名、女子70名）、２年生54名（男子23名、女子31名）、３年生29名（男子23名、女子6名）の計199名を対象として、次のような４つの質問に対して自由記述による回答を求めた。

①「部の約束やきまりを守らない部員の行動とは、どのような行動だと思いますか？」
②「あなた自身や、部全体の競技成績を低下させるような部員の行動とは、どのような行動だと思いますか？」
③「チームの雰囲気を低下させるような部員の行動とは、どのような行動だと思いますか？」

④「あなたが不愉快に感じている部員の行動には、どのような行動がありますか？」

次に、得られた回答を内容によって整理、分類し、類似した項目を省いて80項目を抽出した。その後、体育・スポーツ心理学の専門家である３名の共同研究者とともに、各項目の内容の妥当性ならびにワーディングについて検討が加えられた。項目の内容の妥当性については、４名のうち３名が妥当であると認めたことを判定基準として項目の精選が図られた。また、ワーディングに問題があった項目は、表現を解かりやすく修正した。この結果、13項目が削除され、67項目が問題行動として暫定的に取り上げられた。67項目の詳細については表１に示した。

本調査にあたっては、これらの67項目のそれぞれに対して、不快感を感じる程度、競技成績への影響度、チームの雰囲気への影響度という３つの観点から回答を求めた。具体的な質問文は、それぞれ、「そのような行動にどのくらい不快感を感じますか？」、「そのような行動が、どのくらいチームの競技成績を低下させると思いますか？」、「そのような行動が、どのくらいチームの雰囲気を乱すと思いますか？」というものであった。これらの質問に対する回答は、不快感を感じる程度では、「まったく不快でない（１点）」から「非常に不快である（４点）」まで、競技成績への影響度では、「まったく低下させない（１点）」から「非常に低下させる（４点）」まで、チームの雰囲気への影響度では、「まったく乱さない（１点）」から「非常に乱す（４点）」までの４段階であった。

４．調査方法

調査は、無記名方式、集合調査、強制速度法で行なうことを基本としたが、一部は協力運動部の実情に合わせ、各運動部単位で配付し、後日、本研究者らが回収する宿題調査の形式をとった。

結果および考察

１．具体的問題行動の同定；項目分析

本研究で取り上げる運動部員の問題行動とは、「部集団において暗黙理に抱かれている理想的部員像から逸脱した行動であり、具体的には、他の部員が不快と感じ、チームの競技成績の低下を招いたり、チームの雰囲気を乱す点で問題である行動」であった。そこで、本調査で取り上げた行動内容が、実際に様々な部集団に所属する部員に押しなべて不快と感じられるような行動であるのかを確認しておく必要があった。このことを考慮して、全調査対象者が平均して“やや不快”という以上に不快と感じることを基準とし、不快感の項目得点の平均値が３以上の項目を取り上げ分析することとした。このような手続きによって取り上げられた項目は50項目であり、その内容は表１に示した。

以下、これらの様々な行動の問題性の構造を明らかにするために、同一の行動内容を競技成績への影響、チームの雰囲気への影響という２つの観点から検討する。

２．競技成績の低下を招く問題行動の構造について

まず、競技成績の低下を招くような問題行動の構造を検討するために主成分分析の手法を用いた。因子数の決定は、因子の解釈可能性から検討することとし、項目分析の結果取り上げられた50項目の回答について分析を行なった。この結果、表２に示される６因子が抽出された。因子の解釈は、因子負荷量が0.40以上の項目の内容から検討した。尚、２つ以上の因子に同時に高い負荷量を示した項目については、最も高い負荷量を示した因子に取り上げた。

抽出された第１因子は、上級生として、あるいは下級生として日常に期待されている挨拶行動や部の仕事の不履行、部員として極めて怠慢と言える無断欠席や遅刻について言及した項目より構成されていることから「役割行動の不履行」と命名した。第２因子は、試合時における意欲、練習時の意識の持ち方等について言及した項目より構成されていることから「技能向上意欲の欠如」と命名した。第３因子は、主に上級生の下級生に対する封建的・権威的態度や粗

表1　問題行動リスト

1 部の他の人に対して蔭で文句を言う
3 上級生が不合理な伝統を下級生におしつける
＊ 4 練習以外の部の活動に参加しない
6 下級生が練習の準備や後片付けを怠る
7 言っていることと行動が違う
8 プレーに対する注意を素直に聞かない
9 上級生が指導しても、下級生が技術を習得しようとしない
＊ 10 一人だけ自分勝手に別の練習をする
＊ 11 先生や上級生の前で態度を変える
12 試合中、審判に必要以上に文句を言う
13 器具や道具を粗末に扱う
14 練習について不平不満ばかり言う
15 上級生が威張っていて、自分に都合のいいことしか言わない
17 下級生がレギュラーで試合にでると、上級生が文句を言う
＊ 18 体力のことを考えずに煙草をすう
19 プレーについてお互いに話し合おうとしない
21 試合の時、非レギュラーの上級生がレギュラーの下級生を応援しない
22 決められたメニューをこなそうとしない
23 下級生が自律心をもって行動しない
25 下級生が試合でミスをすると、上級生があとでいやがらせをする
＊ 26 怪我が完全に治らないのに練習を再開する
＊ 27 試合の前日に夜ふかしをする
29 下級生なのにレギュラーになると、部の仕事をしなくなる
＊ 30 上級生が練習の準備や後片付けをしない
＊ 31 指導者に対して批判をする
32 試合中に自己中心的なプレーをする
33 上級生がメニュー通りの練習をしない
＊ 34 できないことに挑戦しようとしない
35 試合で調子が悪いことを他人のせいにする
36 集合時間に遅刻する
38 自分達で決めた練習に文句を言う
39 うまく出来ない人を馬鹿にする
41 上級生が下級生を引っ張っていこうとしない
43 いいかげんなプレーをする
44 試合で負けたことを他の人のせいにする
45 練習を無断で欠席する
46 監督やリーダーの指示に従わない
＊ 47 下級生が上級生になれなれしい態度で接する
48 人に見られているときだけ一生懸命練習する
＊ 49 部のコンパで酒を強要する
＊ 50 試合で失敗すると周囲のことを考えずにすぐに落ち込む
＊ 51 試合でのプレーが他人に頼り過ぎている
52 下級生が上級生や先生に注意されるとふてくされる
53 強くなろうとする意欲にかける
54 真剣に練習している人をちゃかす
55 試合の時、下級生が部全体として必要なものを運ばない
56 適当な理由を使って練習をさぼる
58 下級生が上級生に挨拶をしない
59 上級生が下級生をしごいたり、いじめる
60 他人のやる気をそぐような言動をする
＊ 61 上級生が下級生に雑用をおしつける
63 上級生が自分はやらないで、下級生に命令する
64 だらだらと練習をする
65 ミスをした選手を怒ったり、けなしたりする
＊ 66 下級生が上級生に敬語を使わない
67 部の目標に向かって努力しない
＊ 68 試合の時、失敗を顔に出す
69 お互いに競ったり高め合おうとしない
70 試合を最初からあきらめている
71 上級生が下級生の意見を聞かない
72 まじめにウォーミングアップに取り組まない
73 下級生が挨拶をしても上級生が無視する
75 練習に休みがちなのに、上級生ぶりをする
76 練習をもりあげようとしない（声をださない etc.）
77 試合の時、ミスをしても反省しない
＊ 78 上級生が下級生だけにつらい練習をさせる
80 試合に集中しようとしない

注1）欠落している番号の項目は、内容の妥当性の観点から削除された
注2）＊の付してある項目は、不快感の程度が“やや不快”未満であった

表 2　競技成績得点での 6 因子設定によるバリマックス回転後の主成分分析の結果

	項　　目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
55	試合の時、下級生が部全体として必要なものを運ばない	0.710	0.149	0.194	0.005	0.179	0.001	0.596
58	下級生が上級生に挨拶をしない	0.701	0.015	0.237	-0.014	0.102	0.044	0.560
36	集合時間に遅刻する	0.651	0.132	0.157	0.104	0.217	0.072	0.529
73	下級生が挨拶をしても上級生が無視する	0.579	0.017	0.398	-0.029	0.063	0.206	0.541
29	下級生なのにレギュラーになると、部の仕事をしなくなる	0.579	-0.021	0.320	0.144	0.319	0.117	0.573
45	練習を無断で欠席する	0.578	0.343	-0.042	0.154	0.031	0.062	0.482
6	下級生が練習の準備や後片付けを怠る	0.551	-0.112	0.184	0.245	0.014	0.056	0.414
38	自分達で決めた練習に文句を言う	0.530	0.215	0.144	0.150	0.215	0.255	0.482
56	適当な理由を使って練習をさぼる	0.508	0.347	-0.070	0.336	0.167	0.167	0.552
52	下級生が上級生や先生に注意されるとふてくされる	0.477	0.354	0.215	0.179	0.141	0.197	0.490
23	下級生が自律心をもって行動しない	0.447	0.113	0.156	0.342	0.317	0.170	0.483
21	試合の時、非レギュラーの上級生がレギュラーの下級生を応援しない	0.425	0.073	0.349	0.147	0.411	0.061	0.502
75	練習に休みがちなのに、上級生ぶりをする	0.421	0.129	0.407	0.019	0.034	0.200	0.401
80	試合に集中しようとしない	0.013	0.759	0.195	0.055	0.101	0.121	0.642
69	お互いに競ったり高め合おうとしない	0.117	0.721	0.020	0.206	0.022	0.047	0.579
64	だらだらと練習をする	0.056	0.720	0.136	0.048	0.061	0.204	0.588
70	試合を最初からあきらめている	-0.060	0.681	0.051	-0.074	0.273	0.094	0.559
77	試合の時、ミスをしても反省しない	0.122	0.663	0.195	0.122	0.049	0.168	0.538
53	強くなろうとする意欲にかける	0.023	0.633	-0.066	0.290	0.046	0.009	0.492
67	部の目標に向かって努力しない	0.153	0.609	0.132	0.305	0.087	0.013	0.513
43	いいかげんなプレーをする	-0.021	0.554	-0.068	0.173	0.440	0.203	0.577
54	真剣に練習している人をちゃかす	0.343	0.511	0.156	0.064	0.277	0.050	0.486
60	他人のやる気をそぐような言動をする	0.360	0.478	0.295	0.068	0.210	0.032	0.495
72	まじめにウォーミングアップに取り組まない	0.265	0.470	0.131	0.091	-0.185	0.374	0.491
76	練習をもりあげようとしない（声をださない etc.）	0.374	0.444	0.119	0.163	0.026	0.213	0.423
3	上級生が不合理な伝統を下級生におしつける	0.037	0.062	0.637	0.052	0.067	-0.120	0.433
15	上級生が威張っていて、自分に都合のいいことしか言わない	0.181	0.128	0.555	0.193	0.265	0.138	0.484
7	言っていることと行動が違う	0.243	0.012	0.548	0.270	0.162	0.059	0.463
63	上級生が自分はやらないで、下級生に命令する	0.404	0.171	0.504	0.120	0.055	0.213	0.509
13	器具や道具を粗末に扱う	0.403	0.074	0.488	-0.028	0.053	0.223	0.459
59	上級生が下級生をしごいたり、いじめる	0.397	0.250	0.487	0.156	0.187	0.003	0.517
65	ミスをした選手を怒ったり、けなしたりする	0.091	0.265	0.407	-0.103	0.159	0.224	0.330
9	上級生が指導しても、下級生が技術を習得しようとしない	0.066	0.178	0.173	0.658	0.125	0.106	0.526
8	プレーに対する注意を素直に聞かない	0.024	0.209	0.154	0.623	0.025	0.231	0.510
19	プレーについてお互いに話し合おうとしない	0.207	0.401	0.094	0.504	0.013	0.023	0.467
44	試合で負けたことを他の人のせいにする	0.354	0.232	0.161	0.036	0.630	0.209	0.647
35	試合で調子が悪いことを他人のせいにする	0.292	0.207	0.181	0.104	0.594	0.299	0.613
25	下級生が試合でミスをすると、上級生があとでいやがらせをする	0.210	0.200	0.331	0.269	0.498	0.012	0.515
39	うまく出来ない人を馬鹿にする	0.418	0.183	0.258	0.020	0.473	0.230	0.552
32	試合中に自己中心的なプレーをする	0.010	0.183	0.030	0.028	0.179	0.731	0.602
33	上級生がメニュー通りの練習をしない	0.218	0.153	0.154	0.228	0.179	0.609	0.549
22	決められたメニューをこなそうとしない	0.276	0.277	-0.015	0.393	0.223	0.413	0.528
1	部の他の人に対して蔭で文句を言う	0.316	-0.062	0.339	0.104	0.046	0.299	0.321
12	試合中、審判に必要以上に文句を言う	0.177	0.115	0.339	0.043	0.018	0.243	0.221
14	練習について不平不満ばかり言う	0.321	0.196	0.252	0.240	-0.001	0.391	0.415
17	下級生がレギュラーで試合にでると、上級生が文句を言う	0.141	0.085	0.352	0.333	0.374	-0.033	0.403
41	上級生が下級生を引っ張っていこうとしない	0.243	0.371	0.075	0.395	0.242	0.003	0.417
46	監督やリーダーの指示に従わない	0.363	0.351	-0.147	0.392	0.165	0.307	0.552
48	人に見られているときだけ一生懸命練習する	0.245	0.197	0.207	0.259	0.150	0.333	0.342
71	上級生が下級生の意見を聞かない	0.342	0.381	0.382	0.287	0.009	-0.040	0.493
	2 乗和	6.375	6.236	3.931	2.913	2.781	2.618	
	寄与率（%）	12.751	12.471	7.863	5.825	5.563	5.237	

表3　競技成績各因子の平均と標準偏差

因子	平均	標準偏差
F 1	2.66	0.59
F 2	3.44	0.47
F 3	2.75	0.58
F 4	3.29	0.54
F 5	3.15	0.66
F 6	3.18	0.59

雑な行動等について言及した項目より構成されていることから「上級生の封建的態度」と命名した。第4因子は、相互にコミュニケーションを図ろうとしない行動やプレーに関する他者からのアドバイスを受け入れない態度について言及した項目より構成されていることから「非受容的態度」と命名した。第5因子は、試合の結果や調子の悪さの原因を自己の要因に帰属させず責任転嫁したり他罰的行動を取るといったことについて言及した項目より構成されていることから「他罰的行動」と命名した。第6因子は、自己中心的プレーやわがままな練習態度について言及した項目より構成されていることから「自己中心的行動」と命名した。

表3は、各因子に取り上げられた項目得点の平均値を単純加算し各因子の項目数で割って求められた因子内での項目の平均値（以下、因子平均値と呼ぶ）と標準偏差を示したものである。6つの因子平均値の差を検討するために一要因の分散分析を実施した結果、有意差が認められた（$F(5, 2340) = 285.98$, $P < 0.01$）。Fisher's PLSD法を用いた多重比較の結果、因子平均値の大小関係は、「F 2 > F 4 > F 6 ≒ F 5 > F 3 > F 1」であった（$MSe = 0.16$, 5%水準）。6因子のうちで、技能向上意欲の欠如を示す第2因子とプレーについての他者のアドバイスを受け入れない態度を示す第4因子が高く評定されている。競技成績を向上させるためには、日常の練習への意欲的な取り組みや試合での積極的な関与、そして個人の能力の向上が必要とされることから当然の結果と考えられる。一方、上級生の封建的態度を示す第3因子と上級生と下級生間での挨拶行動や無断欠席などを示す第1因子は低く評定されている。これらの行動は、不快感を感じる程度が3以上であることから、問題行動として取り上げられるものの、競技成績の向上に対しては関連性の低い行動として認知されていると言える。

3．チームの雰囲気を乱す問題行動の構造について

競技成績の低下を招く問題行動の構造の検討の手続きと同様に分析を行なった。その結果、表4に示されるような6因子が抽出され、それぞれ以下のように命名された。第1因子は、これを構成する項目が、競技成績の低下を招く問題行動の第2因子で取り上げられた項目とほぼ対応しており、新たに取り上げられた項目についても技能向上に対する消極的姿勢について言及した項目であることから「技能向上意欲の欠如」と命名した。第2因子は、自己中心的で他罰的、責任感が乏しく不真面目といった幼稚な行動について言及した項目より構成されていることから「社会的未熟性」と命名した。第3因子は、主に上級生のリベラリティーの欠如を示す行動や練習への消極的姿勢等、部の効率的運営を阻害するような行動について言及した項目より構成されていることから「合理的・効率的運営への非協力的行動」と命名した。第4因子は、競技にコミットすることがなく、口ばかりで行動を起こさないことについて言及した項目より構成されていることから「積極的・主体的行動の欠如」と命名した。第5因子は、競技成績の第1因子で取り上げられた項目の内、主に下級生の行動に関わる項目に負荷量が高く、従順な下級生としての態度を取らないことについて言及した項目より構成されていることから「非従順的行動」と命名した。第6因子は、競技成績の第3因子で取り上げられた項目と対応していることから「上級生の封建的態度」と命名した。

表5は、各因子の因子平均値と標準偏差を示したものである。6つの因子平均値の差を検討するために一要因の分散分析を実施した結果、有意差が認められた（$F(5, 2340) = 287.49$, P

表4　チームの雰囲気得点での6因子設定によるバリマックス回転後の主成分分析の結果

	項　　目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
69	お互いに競ったり高め合おうとしない	0.706	0.142	0.006	0.072	0.174	0.081	0.561
72	まじめにウォーミングアップに取り組まない	0.621	0.130	0.003	0.260	0.263	0.033	0.541
53	強くなろうとする意欲にかける	0.568	0.245	0.220	-0.056	0.100	0.016	0.445
64	だらだらと練習をする	0.544	0.349	0.046	0.128	0.212	0.040	0.483
77	試合の時、ミスをしても反省しない	0.519	0.384	0.127	0.166	0.128	0.126	0.493
19	プレーについてお互いに話し合おうとしない	0.512	0.030	0.216	0.231	-0.179	0.161	0.421
76	練習をもりあげようとしない（声をださない etc.）	0.489	0.130	0.415	0.083	0.098	0.108	0.457
67	部の目標に向かって努力しない	0.481	0.332	0.354	0.062	0.053	0.128	0.490
13	器具や道具を粗末に扱う	0.476	-0.073	0.060	0.352	0.232	0.285	0.495
23	下級生が自律心をもって行動しない	0.438	0.086	0.213	0.429	0.096	0.096	0.447
43	いいかげんなプレーをする	0.239	0.677	0.226	0.084	0.034	0.056	0.578
44	試合で負けたことを他の人のせいにする	0.021	0.589	0.387	0.166	0.096	0.204	0.575
35	試合で調子が悪いことを他人のせいにする	0.084	0.580	0.276	0.219	0.075	0.082	0.480
32	試合中に自己中心的なプレーをする	0.186	0.540	0.056	0.305	-0.043	0.061	0.428
54	真剣に練習している人をちゃかす	0.231	0.516	0.164	-0.069	0.328	0.205	0.501
60	他人のやる気をそぐような言動をする	0.229	0.512	0.234	0.008	0.313	0.306	0.560
80	試合に集中しようとしない	0.360	0.483	0.228	0.000	0.089	0.158	0.448
70	試合を最初からあきらめている	0.451	0.474	-0.076	0.009	0.016	0.082	0.441
39	うまく出来ない人を馬鹿にする	0.076	0.442	0.368	0.217	0.209	0.337	0.541
33	上級生がメニュー通りの練習をしない	0.221	0.434	0.358	0.366	0.011	0.095	0.508
25	下級生が試合でミスをすると、上級生があとでいやがらせをする	-0.018	0.223	0.604	0.091	0.164	0.252	0.513
17	下級生がレギュラーで試合にでると、上級生が文句を言う	0.086	0.099	0.546	0.061	0.039	0.312	0.418
21	試合の時、非レギュラーの上級生がレギュラーの下級生を応援しない	0.098	0.212	0.529	0.203	0.121	0.280	0.468
46	監督やリーダーの指示に従わない	0.219	0.383	0.508	0.157	0.258	-0.154	0.567
56	適当な理由を使って練習をさぼる	0.368	0.219	0.508	0.004	0.239	-0.109	0.509
22	決められたメニューをこなそうとしない	0.287	0.302	0.485	0.289	0.149	0.019	0.516
41	上級生が下級生を引っ張っていこうとしない	0.382	0.147	0.415	0.248	0.117	-0.002	0.415
45	練習を無断で欠席する	0.391	0.256	0.413	0.075	0.159	-0.165	0.448
9	上級生が指導しても、下級生が技術を習得しようとしない	0.089	0.176	0.067	0.603	0.230	0.072	0.465
8	プレーに対する注意を素直に聞かない	0.125	0.246	0.134	0.596	0.069	0.047	0.456
6	下級生が練習の準備や後片付けを怠る	0.075	-0.010	-0.025	0.582	0.436	-0.040	0.538
7	言っていることと行動が違う	0.079	0.081	0.126	0.532	0.008	0.244	0.371
14	練習について不平不満ばかり言う	0.196	0.227	0.249	0.437	0.085	0.133	0.368
58	下級生が上級生に挨拶をしない	0.187	0.074	0.118	0.172	0.726	0.138	0.630
55	試合の時、下級生が部全体として必要なものを運ばない	0.266	0.160	0.264	0.175	0.641	0.042	0.609
73	下級生が挨拶をしても上級生が無視する	0.195	0.079	0.303	0.129	0.498	0.320	0.503
52	下級生が上級生や先生に注意されるとふてくされる	0.326	0.154	0.422	0.072	0.445	0.136	0.530
65	ミスをした選手を怒ったり、けなしたりする	0.099	0.281	-0.058	0.028	0.202	0.605	0.500
3	上級生が不合理な伝統を下級生におしつける	0.026	-0.002	0.086	0.149	-0.042	0.598	0.390
63	上級生が自分はやらないで、下級生に命令する	0.249	0.233	0.303	0.128	0.173	0.471	0.476
59	上級生が下級生をしごいたり、いじめる	0.062	0.330	0.239	0.100	0.241	0.469	0.458
15	上級生が威張っていて、自分に都合のいいことしか言わない	0.074	0.259	0.418	0.266	0.000	0.423	0.497
1	部の他の人に対して蔭で文句を言う	0.085	0.030	0.206	0.139	0.155	0.225	0.144
12	試合中、審判に必要以上に文句を言う	0.348	-0.161	0.161	0.398	-0.027	0.296	0.420
29	下級生なのにレギュラーになると、部の仕事をしなくなる	-0.044	0.276	0.279	0.269	0.387	0.201	0.418
36	集合時間に遅刻する	0.349	0.312	0.148	0.126	0.257	0.040	0.324
38	自分達で決めた練習に文句を言う	0.136	0.379	0.387	0.141	0.248	0.153	0.416
48	人に見られているときだけ一生懸命練習する	0.393	0.013	0.361	0.236	0.070	0.122	0.361
71	上級生が下級生の意見を聞かない	0.298	0.236	0.354	-0.005	0.207	0.366	0.447
75	練習に休みがちなのに、上級生ぶりをする	0.172	0.259	0.327	0.159	0.217	0.228	0.328
	2乗和	5.049	4.773	4.648	3.185	2.947	2.794	
	寄与率（%）	10.098	9.546	9.296	6.370	5.894	5.588	

表5　チームの雰囲気各因子の平均と標準偏差

因子	平均	標準偏差
F 1	3.03	0.52
F 2	3.48	0.45
F 3	3.35	0.49
F 4	3.05	0.50
F 5	3.06	0.63
F 6	3.18	0.54

<0.01)。Fisher's PLSD 法を用いた多重比較の結果、因子平均値の大小関係は、「F 2 > F 3 > F 6 > F 5 ≒ F 4 ≒ F 1」であった（MSe＝0.12, 5％水準)。これら6因子の因子平均値はすべて3以上であり、“ややチームの雰囲気を乱す”という以上にチームの雰囲気を乱すものと認知されている。分散分析の結果より、自己中心的で他罰的、責任感が乏しいといった社会的未熟性を示す第2因子、上級生のリベラリティーの欠如や部の効率的運営を阻害する行動を示す第3因子、そして上級生の封建的態度を示す第6因子が高く評定されている。これらの3つの因子にとりあげられた項目は、包括するならば、自己の行動が他者に及ぼす影響や集団全体に及ぼす影響を鑑みていない自己中心的な行動と考えられ、そのためチームの雰囲気を乱すものと認知されのであろう。一方、技能向上意欲の欠如を示した第1因子は、6因子のうちで最も低く評定されている。これらのことから、チームの雰囲気への影響といった場合には、技能習得に関わる行動よりも対人関係維持や集団維持などに関わる行動がより重要視されていると考えられる。

4．問題行動の構造

2．および3．では、全対象者が平均して“やや不快”という以上に不快と感じる行動を問題行動の前提としたうえで、同一の行動内容を競技成績への影響とチームの雰囲気への影響という2つの観点別に主成分分析を用いて検討した。しかしながら、問題行動の構造を行動の背後に潜む心的機制を考慮しつつ明らかにするためには、同一の行動について様々な次元から捉えられた結果を複合的に検討することが必要である。そこで、本研究では、このための第一段階として、2．および3．での分析を統合し、二次元的に問題行動の構造を明らかにすることとした。図1は、x軸方向にチームの雰囲気を乱す問題行動の因子を、y軸方向に競技成績の低下を招く問題行動の因子を因子平均値の低い順に配列し、続いて形成されたセルに該当する項目番号をプロットした図である。従って、チームの雰囲気の項目平均得点と競技成績の項目平均得点によって形成される座標平面とはいえない。しかしながら、二次元的に問題行動の構造を検討する有効な手掛かりとなる。尚、項目布置の意味合いの正確さを期すため、項目番号に続き競技成績への影響、チームの雰囲気への影響、不快と思う程度の順に項目平均値を付した。さらに、各因子の因子平均値の統計学的な差異を明確にするため、2．および3．の分散分析の結果で有意差のみられなかった因子間は破線で示した。以下、競技成績への影響とチームの雰囲気への影響という2つの観点から捉えられる運動部員の種々の問題行動の位置づけを明らかにし、問題行動の構造について検討した。

まず特徴的なのは、B－7とG－7に位置づけられる行動である。両セルの項目は、競技成績での主成分分析では「技能向上意欲の欠如」と解釈された因子に取り上げられていたが、チームの雰囲気の主成分分析の結果を複合することによって2つに分割されたものである。G－7の項目は、全て他の部員に非常に不快感を与え、競技成績への影響とチームの雰囲気への影響の両方において高く評定されていることから、運動部員としての「問題行動」の典型と位置づけることができる。これらの項目は、チームの雰囲気における主成分分析では「社会的未熟性」と解釈された項目であり、個人の技能向上意欲の欠如を示し、かつ社会的未熟性が感じられる行動である。項目内容は、練習や試合場面で自己の意欲のなさを露呈し、さらに他者の意欲までも減退させるような行動を示している。意欲のないことが競技成績の低下を招き、それが他者の意欲にまで波及することがチーム

の雰囲気の低下を招くものと認知されたのであろう。一方、B－7の項目は、競技成績への影響は高く評定されているものの、チームの雰囲気への影響は低く評定されている。項目内容は、主として、個人に限定された技能向上意欲の欠如した行動を示している。競技志向の成員にとっては、ある特定部員のこうした行動がチーム全体の雰囲気に重篤な影響を与える行動とは認知されないのであろう。ただ、競技成績の低下を招くと捉えられていることから運動部員としての「問題行動」と位置づけられる。

B－7と対比すべき行動として、チームの雰囲気への影響が高く評定されているG－5、G－4が挙げられる。G－5、G－4の項目は、チームの雰囲気の主成分分析において「社会的未熟性」と解釈された因子に取り上げられていた項目であるが、競技成績の主成分分析の結果と複合させることによってG－7から独立した項目である。これらの項目は、自己の責任を転嫁させ他罰的で自己中心的な行動を示している。G－7の項目は、他者の意欲を減退させたり、チームの競技成績に密接に関わることから社会的に未熟だと判断される行動である。一方、G－5、G－4の項目は、自己中心性や責任転嫁といった人間性に対する懐疑によって社会的な未熟性を感じさせる行動である。そのため、G－7ほど競技成績に影響するとは認知されていない。しかし、直接他の部員に否定的に関与する行動であることから強い不快感を与え、非常にチームの雰囲気を乱す「問題行動」と位置づけることができる。

次に、A－2、D－2、F－2のセルの位置

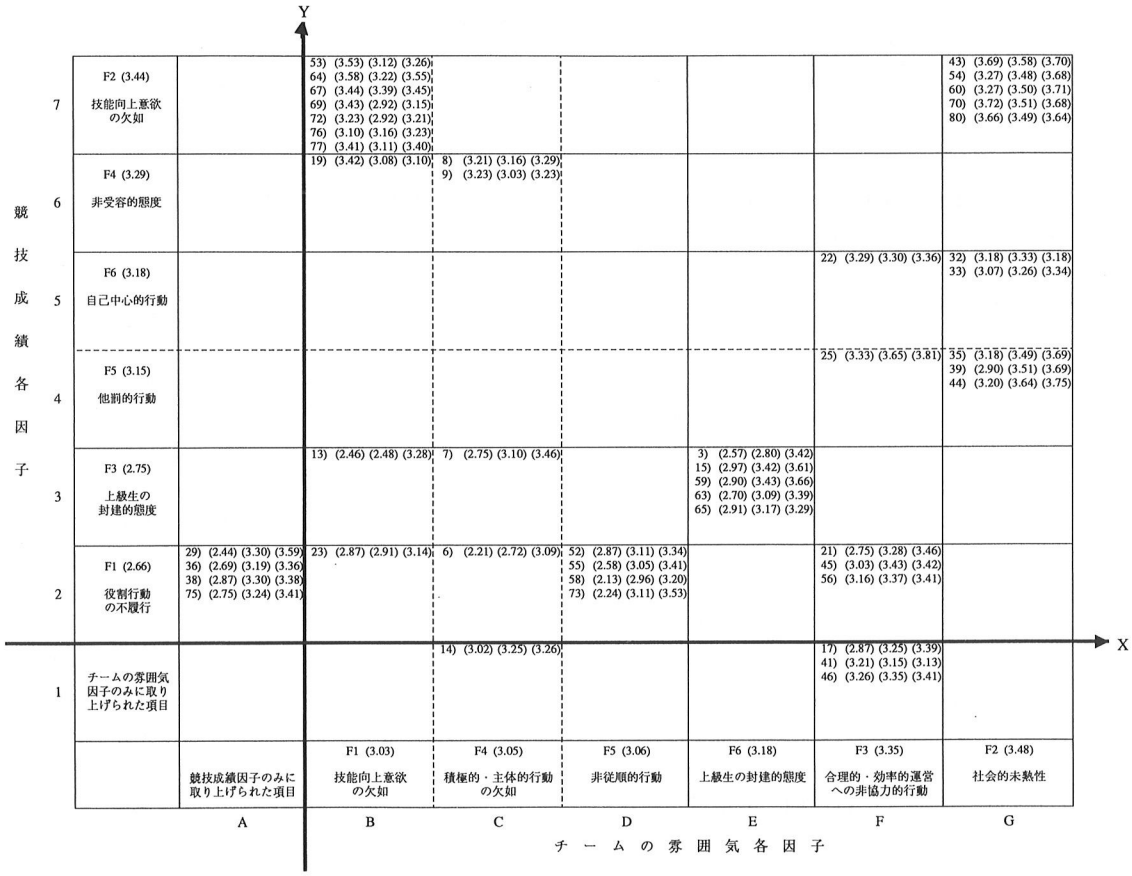

図1　問題行動の構造

づけについて考察する。これらのセルに取り上げられた項目は、競技成績の主成分分析では「役割行動の不履行」と解釈されていた因子に取り上げられていた項目であり、競技成績への影響が低く評定されている。そして、チームの雰囲気の主成分分析の結果を複合させることによって、３つに分割されたものである。Ａ－２の項目は、競技成績の第１因子としてのみ取り上げられているが、チームの雰囲気の主成分分析結果（表４）を詳細に見てみると、項目29は第５因子に0.38という負荷量を示し、項目38と75は第３因子にそれぞれ0.38、037という負荷量を示している。これら３つの項目は因子負荷量が0.4に満たなかったことから因子の解釈にあたってはそれぞれの因子に含められなかったが、これらの項目が該当する因子に含められたとしても、因子の解釈に不一致を来たすものではない。それゆえ、競技成績の主成分分析で「役割行動の不履行」として取り上げられた項目は、チームの雰囲気の主成分分析結果と複合させることによって、概ねＤ－２とＦ－２の行動に分割されると考えられる。項目内容をみると、Ｄ－２に布置する項目は下級生として期待される挨拶の不履行などの非従順的行動を示し、Ｆ－２に布置する項目は無断欠席などの合理的な部の運営に対する非協力的行動を示している。これらの行動は、競技場面で観察される行動ではないため競技成績への影響が低く評定されたのであろう。しかしながら、特にＦ－２のような集団成員に暗黙理に共有されているルールから逸脱した行動は、Ｂ－７のセルとは対象的で、チームの雰囲気を乱す「問題行動」として位置づけられよう。

この他、この図から読み取れる特徴として、Ｅ－３の行動が挙げられる。Ｅ－３に取り上げられた項目は、競技成績の主成分分析においてもチームの雰囲気の主成分分析においても上級生の封建的態度と命名された因子に含まれた項目である。異なる２つの観点から主成分分析を実施したにも関わらず、ほぼ同一の項目がそれぞれの観点で一つの因子を形成したことは、運動部集団にあって上級生の封建的態度が特徴的な行動であることを示している。また、このようなＥ－３に示される上級生の封建的態度とともにＤ－２に示される下級生として期待される行動を果たさない非従順的な行動が抽出されたことも注目すべきことである。これまで、部活動に対して抱く感情と上下関係との関連に示唆を与える研究は多い[9,12,16,17,18]。例えば金[12]の運動部における集団規範に関する研究において取り上げられた態度規範の因子は、上級生の封建的態度に下級生がどのような従順的態度を示しているかといった項目で構成されている。本研究においても「上級生の封建的態度」、主に下級生の「非従順的態度」の因子が抽出されたことは、運動部活動に対する感情に関連する研究を行なう際には不可避な要因となることを示すものである。ただ、本研究の問題行動の定義から考えた場合、これらの行動の問題性を指摘する根拠は薄いようである。Ｅ－３の上級生の封建的態度を示す行動は、チームの雰囲気を乱す行動としては３番目に高く評定されていることから、チームの雰囲気を乱す問題行動に位置づけることも可能である。しかし、このセルに布置した項目の中でも不合理な伝統の押しつけなどの行動は、チームの雰囲気や競技成績の低下への影響については比較的問題であるとは捉えられていない。さらに、Ｄ－２に位置する下級生の非従順的な態度は、競技成績への影響もチームの雰囲気への影響もさほど重視されていない。これらのことから考えると、上級生の封建的態度や非従順的行動は、集団全体へのネガティブな影響を持つ問題行動とは言えないようである。ただし、これらの行動は他者に不快感を感じさせることから、集団全体での問題行動ととらえるより、個々の成員間で問題となる行動と解釈すべきであろう。これらの行動に対しての不快感がチームの機能のどの側面に影響を与えるのかという点については今後の検討が必要である。また、問題行動生起のメカニズムや対処方略についても今後検討していくこととなる。

ま　と　め

本研究では、問題行動を「部集団において暗黙理に抱かれている理想的部員像から逸脱した行動であり、具体的には、他の部員が不快と感じ、チームの競技成績の低下を招いたり、チームの雰囲気を乱す点で問題である行動」と操作的な定義づけを行なった。そして、大学運動部員によって認知される問題行動の構造について検討し、以下のような結果を得た。

1）競技成績を低下させる問題行動として、「役割行動の不履行」、「技能向上意欲の欠如」、「上級生の封建的態度」、「非受容的態度」、「他罰的行動」、「自己中心的行動」の6つの行動が大学運動部員に認知されていることが明らかにされた。

2）チームの雰囲気を低下させる問題行動として、「技能向上意欲の欠如」、「社会的未熟性」、「合理的・効率的運営への非協力的行動」、「積極的・主体的行動の欠如」、「非従順的行動」、「上級生の封建的態度」の6つの行動が大学運動部員に認知されていることが明らかにされた。

3）競技成績への影響とチームの雰囲気への影響の2つの次元から問題行動の構造を検討し、以下のような特徴を持つ問題行動が抽出された。

・競技成績の低下とともにチームの雰囲気を乱すことから問題となる、他者の意欲の減退をも招く未成熟な技能向上意欲の欠如した行動

・競技成績の低下を招くことから問題となる、個人に限定された技能向上意欲の欠如した行動

・チームの雰囲気を乱すことから問題となる、責任を転嫁させ、他罰的で、自己中心的な未成熟な行動

・チームの雰囲気を乱すことから問題となる、合理的な部の運営に対する非協力的行動

・集団全体へのネガティブな影響は持たないものの、不快と感じられる程度の高いことから個人間の問題と考えられる、上級生の封建的行動と下級生の非従順的行動

尚、今後の課題としては、本研究で抽出された問題行動が認知の次元で抽出されていることより、実際の競技成績との関連や仲間関係などとの対応について検討することが挙げられる。また、本研究で捉えられた問題行動の出現頻度やそれらの行動が表出する心理的機制についても検討することが必要である。

参考・引用文献

1）阿江美恵子「集団凝集性と集団志向の関係、および集団凝集性の試合成績への効果」体育学研究、29:315-323, 1985.

2）阿江美恵子「スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究」体育学研究、32-2:117-125, 1987.

3）Carron, A. V., "Cohesiveness in sport groups: Interpretations and considerations.", Journal of Sport Psychology, 4:123-138, 1982.

4）Carron, A. V., Widmeyer, W. N., & Brawley, L. R., "The development of an instrument to assess cohesion in sport teams: The Group Environment Questionnaire.", Journal of Sport Psychology, 7:244-266, 1985.

5）Chelladurai, P., & Saleh, S. D., "Dimension of leader behavior in sport; development of a leadership scale", Journal of Sport Psychology, 2:34-35, 1980.

6）長谷川博一「思春期青年の問題行動—外向型と内向型の比較調査—」名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要、3:137-143, 1988.

7）長谷川博一「青年期男女に見られる問題行動傾向の構造」東海女子大学紀要、9:75-85, 1989.

8）長谷川博一「青年期における問題行動傾向と自己評価的意識」東海女子大学紀要、10:109-116, 1990.

9）今橋盛勝・林　量俶・藤田昌士・武藤芳照（共編）、スポーツ「部活」、草土文化、1987.

10）伊藤豊彦「問題選手に対する原因帰属—選手の認知と指導法の判断—」体育学研究、34-2:159-166, 1989.

11）桂　和仁・中込四郎「運動部活動における適応感を規定する要因」体育学研究、35:173-185, 1990.

12）金　明秀「運動部における集団規範の研究」スポーツ心理学研究、19-1:11-17, 1992.

13）Kim. M., "Types of leadership and performance norms of school athletic teams.", Perceptual and Motor Skills, 74:803-806, 1992.

14）Kim. M., & Y. Sugiyama., "The relation of performance norms and cohesiveness for Japanese school athletic teams.", Perceptual and Motor Skills, 74: 1096-1098, 1992.

15）松原敏浩「部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果—中学校教師の視点からのアプローチ—」教育心理学研究、38:312-319, 1990.

16）メンタルヘルス研究会（編）、メンタルヘルス実践

体系6　問題行動　暴力・非行、日本図書センター、1988.
17) 三隅二不二、リーダーシップ行動の科学、有斐閣、1978.
18) 城丸章夫・水内　宏（編）、スポーツ部活はいま、青木書店、1991.
19) 内山喜久雄、問題児臨床心理学、金子書房、1963.
20) 内山喜久雄・坂野雄二（編著）、実戦問題行動教育体系4、開隆堂、1991.
21) 安香　宏、適応と不適応、性格心理学3、福島　章（編著）、金子書房、1989. pp. 67-82.

（1993年12月17日受付）